

喜多流 第47回

# 中尊寺 薪能

◆中尊寺落慶九〇〇年記念

6月1日(月) 10時 千ヶツト発売開始

令和8年8月14日(金)午後4時20分始  
中尊寺白山神社能舞台

祭儀  
火入之儀

仕舞 土車 大島輝久

和泉流

狂言 名取川 野村万作

アド・名取の某 石田幸雄

一七・四〇

能 三輪 佐々木多門

後シテ・三輪明神  
前シテ・里女

ワキ・玄寶僧都 宝生常三

アイ・三輪の里人 野村裕基

終演予定 一九・一五頃

奉賛観能券

SS 一〇、〇〇〇円  
S 七、〇〇〇円 (当日八、〇〇〇円)  
A 四、〇〇〇円 (当日五、〇〇〇円)  
B 三、〇〇〇円  
学生 三、〇〇〇円

お申込み 中尊寺薪能の会 電話(〇一九二)四六一二一一〇

※雨天も催行(SS席は屋根架設) ※写真撮影・録音・録画不可

〈喜多流〉中尊寺

# 新能

◇中尊寺落慶九〇〇年記念

—一六・二〇—

祭儀 白山神社宮司

火入之儀 薪能奉行

—一六・四五—

仕舞 土車 大島輝久

地謡 佐藤寛泰  
金子敬一郎  
内田成信  
塩津圭介

和泉流

狂言 名取川 野村万作

アド・名取の某 石田幸雄

地謡 高野和憲  
野村萬斎  
破石晋照  
飯田豪

(休憩)

—一七・四〇—

舞台写真 狂言「名取川」 万作の会 提供



能 三輪

後シテ・三輪明神  
前シテ・里女

佐々木多門

ワキ・玄寶僧都 宝生常三

アイ・三輪の里人 野村裕基

大鼓 亀井洋佑 小寺真佐人  
小鼓 森貴史 一噌隆之

後見 塩津哲生 中村邦生  
友枝真也

地謡 佐藤寛泰 友枝雄人  
金子敬一郎 長島茂  
内田成信 出雲康雅  
塩津圭介 狩野了一

終演予定 一九・一五頃

仕舞「土車」

出家をした主君の行方を尋ねる家臣が、土車(土を運ぶ大八車)に主人の幼い子に乗せて、遊芸しながら諸国を巡る。阿弥陀如来をご本尊とする善光寺に辿り着くまでの一場面。

狂言「名取川」

比叡山で受戒した僧。「希代坊」「不肖坊」と名前を二つ付けてもらうが、物覚えが悪いので両袖に墨で書いてもらう。さらに忘れないようにと、二つの名を織り込んだ謡を口ずさみながら歩いていくと、大きな川に行き当たると。川を渡る際に深みにはまってしまった僧が岸に這い上がると、袖に書かれていた名前が消えている。慌てた僧が流れた名前を笠ですくおうとしていると、在所の者が通りかかり……。ナンセンスでとばけたおかしみを持つ演目。流れた名前をすくう場面で舞う川尽くしの小舞がひとつの見どころです。

能「三輪 岩戸之舞」

大和国(いまの奈良県)の三輪の山陰に、玄寶僧都という高僧が、人里離れて草庵を結び仏道に専心しているところへ、ある女が毎日、仏前に供える關伽水と櫛を摘んで持ってくるのでした。  
ある日、僧都はこの女に請われて衣を与え、その住み家の在所を尋ねると  
「我が庵は三輪の山もと恋しくは訪ひ来ませ杉立てる門」と古歌を詠んで女は姿を消してしまいます。  
三輪の里人が、御神木の杉の枝に玄寶僧都の衣が掛かっているのを見つけて知らせたので、僧都はその杉へと向かいます。  
杉の下枝には、はたして先の衣が掛かっており、金色の字で「三つの輪は清く淨きぞ唐衣 くると思ふな」と思はじ」と、歌が書かれていたのでした。  
やがて三輪の女神が霊妙な姿をあらわして、三輪に伝わる神話や、天照大御神が岩戸隠れされた時の神遊びのさまを舞い語ります。伊勢の天照大御神と三輪の神は一体であることを示して、夜明けの光のうち、僧都の夢とともに女神は消えてしまうのでした。

この度の「三輪」では「岩戸之舞」の小書(特殊演出)が入ります。曲の後半場面、日神である天照大御神が岩戸へ身を隠してしまい暗闇となった世界で、その源を探るありさまを象徴的にみせて神話空間を舞台に現出します。

表「三輪」使用写真 佐々木多門 所演